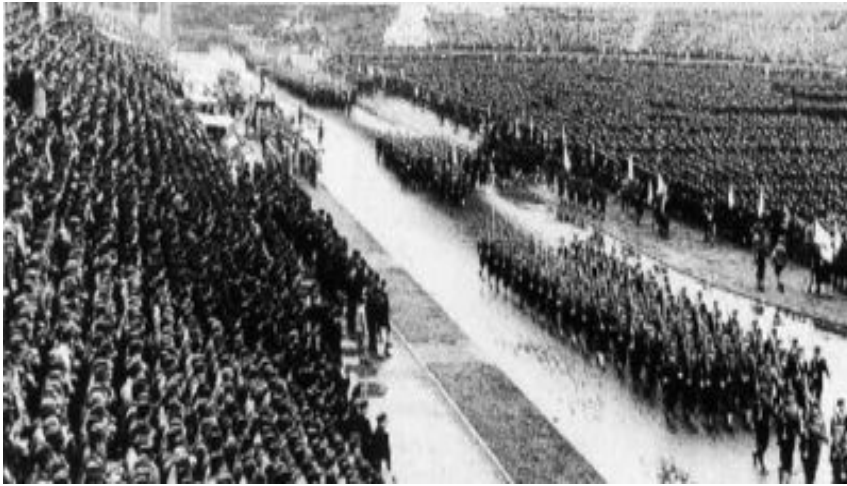


(1) 繰上げ卒業

中国を戦場とした戦争は、1931(昭和6)年に満州事変が起き、1937(昭和12)年には日中戦争となって戦場は中国全域に広がった。さらに1941(昭和16)年12月の真珠湾攻撃以降、



戦線は太平洋・東南アジアにまで拡大する。次第に戦況は日本にとって思わしくなくなり、戦闘員と物資は不足する。ことに1942(昭和17)年6月のミッドウェー海戦で日本

海軍が敗れたことを転機に、敗色が濃くなってゆく。加藤が高校生から採りつづけていた『青春ノート』が同年5月で終わっているのは、戦況悪化が加藤に与えた精神的影響も一因かもしれない。

東条内閣は学生に与えられていた徴兵猶予を制限し、修業期間を次第に短縮し、1943(昭和18)年10月には文系の学生を中心に学徒出陣を始めた(上写真)。加藤の周囲でも、マチネ・ポエティック同人の中西哲吉や親しかった原田義人が召集された。加藤は理系だったこともあり、召集されなかったが、いつ召集されるか分からないという不安と、召集されずに済んだことに対する「後ろめたさ」を感じていた。それが後年に「サヴァイヴァル・コンプレックス」を口にする理由のひとつだったのではなかろうか。

旧制大学医学部の修業期間は4年間であり、1940年4月に入学した加藤は、通常ならば1944年3月に卒業の予定であった。しかし、6カ月間の修業期間の短縮があり、卒業は繰り上げられ1943年9月となった。軍医となることを希望する医学生も少なからずいたが、加藤は軍医になることを希望しなかった。



(左写真：医学部内科教室の学生たち、後方ひとり無帽が加藤、最前列右端は島藺安雄。加藤と島藺は敗戦直後の日米合同原爆影響調査団に加わった)